

## コロナ禍の下での高校山岳部の活動 ―現状と課題―

大 西 浩 ((公財)全国高等学校登山専門部顧問・長野県大町岳陽高校教諭)

新型コロナウイルスの感染が広がり始めた2020年2月26日、「週末(2月29日)は梅池で山スキーだ」と、登山計画書を練り上げ、翌日放課後のミーティングで最終確認をしようと昼休みに私の研究室に顔を出した部長のM、副部長のAと話を詰めた。折しも学年末テストが終了したばかりの二人の顔は久しぶりの山行に向けて、晴れやかな気分と期待感にあふれていた。

しかし、その日、首相は国民に向けて、2週間のスポーツ・文化イベントの自粛を要請した。それを受けて放課後の職員会議で、以後の一切の部活動が当面中止になった。しかし、その時はまだ事態の切迫した状況を十分に理解できていなかった。追い打ちをかけたのが、翌27日の首相の理不尽かつ唐突な学校休校指示だった。この前代未聞の号令を受けて、そのまま春休みまでの間、学校という場における教育活動が強制的に停止させられ、ご多分に漏れず、山岳部も全くのお手上げ状態となった。生徒のいないがらんとした学校の窓から、青空の下に美しく輝く後立山の峰々を見ながら恨めしく思う毎日が続き、これまで経験したことのない喪失感に襲われた。

4月に入り、いったんは学校が再開されたものの、数日で再び休校となり、その後4月21日には、国内の山岳4団体が登山愛好家に、「登山の自粛」を呼びかける事態に至った。通常高校山岳部にとっては、6月初旬に行われるインターハイの県予選に向けて、4月から6月までの時期は、新人教育の場として、教わる下級生にとっても、教える上級生にとっても極めて重要な時期となる。この時期に登山の技術・

体力・知識は格段に向上する。それに先駆けての3月は、雪上での生活技術や歩行技術の訓練を通して上級生が来たるべき新入生を迎えるために実力を高める時期だ。

長く高校山岳部の指導に携わってきた私は、高校山岳部は自立した安全登山の実践者を育てるための極めて優れた教育システムであり、インターハイの名で親しまれている高等学校総合体育大会登山競技という場はそのための非常に重要なハードウェアであると考えている。登山関係者の中には、インターハイというと競争を思い浮かべ、違和感を覚える向きもおられるかもしれないが、山岳部におけるインターハイは、他のスポーツにおける単なる競争としての競技とは多少意味合いを異にしていることをご理解いただいた上でお読みいただきたい。

一般にスポーツは人間が相手であり、人間が決めたルールの中で競い合うものである。ところが登山は大自然や時には自分自身と向き合うスポーツである。大自然の懐の中で自分自身を高めることこそ登山の大きな魅力であり、そこが他のスポーツと大きく違う側面である。フィールドやその日の天候また季節により条件が異なり、ルールのないのが登山の面白さでもある。しかし、その面白さを享受するためには、やらねばならないこと、知らねばならないことがたくさんある。インターハイで行われる登山競技は、そのルールのない世界の中で、身を守るための安全登山の技術や体力などの総合力を客観化して評価するところにその主眼がおかれている。若い高校生は、ときに競技性をより意識し、その評価に

## 2-1. 登山界の現状と課題 特集-登山と新型コロナウイルス-

のみとられてしまうということも起こりがちではある。しかし、それだけに墮してしまふことなく、審査員は単に採点して終わらせることなく、炊事や幕営技術などの審査の場面では以後の登山活動に役立つように、安全登山の観点からのアドバイスや改善したほうが良い点などを丁寧に生徒たちに伝える。閉会式ではこれらのアドバイスをまとめたものが、審査員会講評という形で参加した全チームに向けて発信される。のみならず、生徒間でも他校との計画書の交換やテント場での交流が行われ、互いの工夫や知恵を紹介し合うことなどを通して、その後の山行に活かすこともできる。いわばインターハイの先、結果の先にこそ目標があるのである。

しかし、コロナ禍の下で、それに向けての重要な準備の機会がすべて失われてしまった。山は逃げない。されど、三年間（実質には2年数か月）という限定された期間における、極めて重要な時期の数か月の停滞は、かけがえのない時間の喪失である。

6月の学校再開に合わせ、部活動も段階的に再開される一方で、社会全体でも制限つきながら登山自粛が解除の方向で動き始めた。本校山岳部も社会状況を見ながら、新型コロナウイルス対応の活動指針

（参考資料1）を定めて注意深く活動を始めたが、長野県教育委員会が定めた部活動再開におけるガイドラインの中にある宿泊禁止条項がネックになり、テント泊を伴う合宿や縦走など正常な活動への復活は先延ばしされた。仲間と語り、同じ釜の飯を囲んでテント生活をするという山岳部にとっては、生命線とも言える活動ができない状態のまま、本来ならば長期の合宿や縦走という最も充実した活動が行える夏季休業を迎えることとなった。

締めくくりのできなかつた3年生、次期への橋渡し役を果たしきれない2年生、入部はしたものの希望と違う活動を余儀なくされている1年生。分散登

校の中では、全員が一堂に会してのミーティングも開けないまま、日々美しい山を見つめながら、それぞれに苦悩の日々が続いた。

しかし、そんな中で、僅かな救いもあった。制限付きながら部活動再開が許可されたのは学校再開の6月第2週の月曜日。この日は本来ならインターハイの県大会の行われた翌日にあたる日でもあった。インターハイに行けたにせよ、行けなかつたにせよ、もし県大会が開催されていたならば節目に当たる日になるはずの日であった。そんな日に分散登校が解除されて初めて1年生から3年生まで部員全員がミーティングに顔を揃えた。

例年ならば、インターハイの県大会が終わり、3年生から後輩に引き継ぐためのミーティングである。県大会がなかつた今年ではあるが、それとはかわりなく時は推移し、進路選択をにらんで3年生が引退を迎える時期が来ていた。一人一人の3年生が後輩にまた自分自身に3年間を振り返って、今の気持ちを語りかけた。その中で全員の一致したところは、できることなら最後に、仲間全員で毎日自分たちが眺めてきた北アルプスに登りたいということだった。

そこで、いずれも日帰りではあるが、6月中旬におくればせながらの新入生歓迎登山として小熊山で日帰り登山と山頂での炊事練習を設定し、7月に北アルプス唐松岳に登って締めくくりをして、3年間の山岳部生活のけりをつけることに決めた。6月の山行では3年生が下級生を気遣う姿やいろいろなことを伝えたいという思いのあふれた山行だった。そして迎えた7月23日に予定した唐松岳山行は、「北アルプスの中でも比較的手軽に日帰りで登れる」というシチュエーションが災いし、日頃懇意にしてお世話にもなっている唐松岳頂上山荘の中川支配人から「登山者の集中から、土日には想定外の三密が生ま

れる」ということで、「地元の大町岳陽高校でもあり、来ていただくのは嬉しいことであるが、今回に限ってだけは、本当に申し訳ないが入山を控えてほしい」という極めて切実でかつ苦渋に満ちた連絡を受け、中止せざるを得なくなった。

悔しさの中で、生徒たちは自分たちで次のような結論を出す。「自分たちは山が好きで山岳部にはいり、仲間と共に山を登ることで様々な経験をしてきた。3年生になってからはインターハイも合宿もできなくなってしまったが、やはり仲間全員でいい山登りをしたい。」と。そこで、学校近郊にあり、これまで登山道整備で何度も登った本校ゆかりの山「鍬ノ峰」に登ることを選んだ。7月梅雨明け前で大雨の予想される中の登山は、結果的には頂上に到達することさえかなわなかったが、その日の最高到達点で、山岳部に連綿と流れる「山岳部歌」をこれまでにない大きな声で歌った。この山行に同行することで、1、2年生はそこに込められた3年生の思いを真摯に受け止め、日々の日常活動が当たり前に行えることを素直に喜び、いつか仲間とテント泊ができる日に向けて、以前にもまして毎日のトレーニングや天気図・読図などの学習に地道に取り組みはじめた。

このように、インターハイの県予選が中止され、夏山合宿も許可されない状況で、安全登山の基礎技術を高めるための上級生から下級生への登山技術や知識の伝達場が失われ、山岳部という一つの文化が存続の危機に瀕している。新型コロナウイルスは、間違いなく高校山岳部のあり方を根本から変えようとしている。その中で、我々は生徒とともに新しいスタイルを創造していかななくてはならない。いくつかの都道府県の高体連登山専門部では、テント生活が許可されていない暗闇の中でも、再開された暁には即座に対応できるようにと、コロナ禍の下におけ

る3密回避のテント泊の基準作りを進めた。

夏に向けて、新型コロナウイルス感染者の発生が長く見られなかった岩手県高体連登山専門部では、日本山岳ガイド協会や日本登山医学会の出しているガイドラインなどを参考に、インターハイ帯同経験のある山岳医のアドバイスや岩手県山岳・スポーツクライミング協会の支援を受けて、いち早くこの基準作りに着手し、6月11日に参考資料2として示したガイドライン（以下岩手モデルと表記する）を策定した。地域により感染状況が異なっている実情や各県の教育委員会の指示の違いなどから、全国高体連としての統一的な基準を示すには至っていないが、いくつかの県では、この岩手モデルに準じた各県ごとの基準を作成しているのが実情である。

長野県では10月に入りようやく宿泊を伴う部活動の再開が許可されるようになったが、基本的にはこの岩手モデルに沿ったものを長野県高体連版として定め、運用している。しかしながら、解禁された時期が10月ということもあり、実際にテント泊が行われている学校は少数である。また、昨今は特定の学校の山岳部に生徒が集中する傾向が見られることから、予算も十分でない山岳部においては、岩手モデルで定められている「ソロテント推奨、4人用テントにも最大宿泊人数は2人まで」という縛りにより、テントの絶対数の不足も問題になろう。さらには、密を回避するためとはいえ、「常にテントの2方の出入り口を解放し通気を確保すること」についても今後冬場を迎えるに当たっては、現実的な対応はとりにくい。

大町岳陽高校では、10ヶ月近くテント泊が行われなかったことから、実際に山行にテント泊を取り入れるには、①テント設営技術、②生活技術、③食料を含む幕営装備を背負える体力の3つの観点を補うことが必要であろうと考え、10月11月の2ヶ月を助

## 2-1. 登山界の現状と課題 特集-登山と新型コロナウイルス-

走期間とし、段階的にテント生活回復プログラム（資料3）を組んで徐々にならしながら本格的な活動に移行するようにした。10月のBC方式での山行と11月の縦走を実地で経験させることで、本校では何とか冬山シーズンを前に、態勢を整えることができた。しかし、全国高体連登山専門部の谷口事務局長によれば、11月段階でテント泊を行えている学校は、全国でも極めて少数であるとのことである。この調子でいくと、今後冬山シーズンを迎えるため、圧倒的多数の高校生がテント生活を経験しないまま1年を過ごすというケースが生まれる可能性は高く、2021年度には一度もテント生活を経験したことのない2年生が1年生を迎えるという山岳部が増えることは容易に想像できる。

私は山好きの一高校山岳部の顧問に過ぎない。しかし、長くこの仕事をしてる中で私自身山岳部の生徒たちに育ててもらってきた。また、インターハイを通じて長野県はもとより、全国の顧問仲間にも多くのことを教えてもらってきた。さらに、社会人の山岳会に所属して県の山岳協会にも関わる中で、国の内外を問わず、楽しくかつ刺激的な山登りを続けてくることができた。そんなことへの恩返しので

味も込めて、今から20年前に自分のところに集まってくる情報を共有することで、高校山岳部の文化に少しでも貢献できればという気持ちからインターネットを介して双方向の情報発信を始めた。コロナ禍の下での私の発信に呼応して、全国の仲間たちも、出口の見えない状況の中で、もがいている様子を伝えてくれる。学校が、ひいては社会全体が一時的に機能不全になるという経験したことのない状況におかれる中で、これまで何ん自由なく登山を続けられてきたことの意味やありがたさが身に染みて感じられる。そして、教育を担う学校現場で、生徒の成長において、授業以上に部活動の持つ意味の重要性に改めて気づかされているのは、ひとり私だけではない。

高校山岳部の活動は、かけがえのない文化活動である。山岳部の楽しみはあまたあれど、山で気の合う仲間とのテント生活は格別である。日常から離れて、苦勞して山に登った末に、大自然に抱かれ、そこに棲む生物の息吹を感じながらすべてに身を任せる。いつになったらそれを謳歌できる日が訪れるのだろうか。それまで、高校山岳部文化を如何につなげていけばいいのか、全国の仲間と連携をとりつつも、悩みは尽きない。

### 新型コロナウイルス感染症のリスクに伴う大町岳陽山岳部活動に当たっての指針

大町岳陽高校 山岳部

新型コロナウイルス感染症に対する警戒が必要とされる時期における山岳部の山岳地域での活動については、以下のような方針にもとづいて実施する。

- 1, 長野県観光部山岳高原観光課の公表している「登山者への5つのお願い」（裏面参照）に基づいた登山を実施する。
- 2, 当面、県内〔県境稜線上も含む〕の登山にかぎる。
- 3, 当面日帰り登山からはじめ、状況をみながら「テント泊」を再開する。
- 4, 活動に不安のある生徒の活動を強制しない。

#### ◎体調管理

- ・日頃の体調管理に加え、当日の検温を徹底する。
- ・少しでも風邪の症状があったら入山を控える。

#### ◎情報収集

- ・テント場利用の場合も事前に連絡をする。

#### ◎山選び

- ・救助・医療体制に影響を与えないことに留意し、十分に難易度を落とした山選びをする。
  - \* 日常におけるトレーニングをする。
  - \* 顧問は生徒の登山技術・体力を十分に把握し、プランニングのアドバイスをする。
  - \* 原則として参加者全員（生徒・顧問）のミーティングで計画を完成させる。

#### ◎行動計画

- ・混雑を回避する登山計画により行動すること。
  - \* パーティ人数が5名程度になるようなパーティにわけた計画を立てて実行する。
  - \* 他の登山者と一定の距離をとった行動が可能になるよう、時間的なゆとりをもった計画を立案する。
  - \* 入下山口までの移動における三密を回避するために、保護者のみなさまにもご理解並びにご協力をいただく。

#### ◎感染症予防グッズを携行し、ゴミは持ち帰ること

- ・感染予防グッズ（消毒液、体温計、マスク〔バフ等〕、シュラフ、使い捨て手袋、多めの水、密閉ゴミ袋等）を持参し、ゴミは持ち帰る。
- ・山小屋等現地でルールが定められている場合は、そのルールに従う。

### テント生活についてのガイドライン

岩手県高体連登山専門部

令和2年6月1日付通知の「～学校の新しい生活様式～県立学校の部活動について」につきまして、今後の部活動の指針が示されました。指針の中にある移動及び宿泊時等における「三つの密」の徹底的回避のため、登山活動においてはテント泊についてのガイドラインの策定が求められます。

日本山岳ガイド協会のガイドラインにはテント泊については詳しい記載はありません。JMCSA医科学委員会でもガイドラインを作成中ですがテント泊には触れていません。そこで、岩手県高体連登山専門部では、上部団体の岩手県山岳・スポーツライミング協会（JMCSA医科学委員会を含む）の支援を受けながらテント泊についてのガイドラインを策定しました。以下の通りです。

## 2-1. 登山界の現状と課題 特集-登山と新型コロナウイルス-

基本的にはテント内に一緒に過ごすメンバーは感染していないことが大前提である。そこで以下に該当する生徒を参加させることは避けなければならない。参加生徒には以下のことに該当しないかをチェックし、書面で保護者の同意を得る。

- ア 平熱を超える発熱
- イ 咳（せき）、のどの痛みなど風邪の症状
- ウ だるさ（倦怠（けんたい）感）、息苦しさ（呼吸困難）
- エ 嗅覚や味覚の異常
- オ 体が重く感じる、疲れやすい等
- カ 新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある場合
- キ 同居家族や身近な知人に感染が疑われる方がいる場合
- ク 過去14日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航歴又は当該在住者との濃厚接触がある場合
- ケ 過去14日以内に岩手県から慎重移動を要請されている（6月10日現在）北海道、一部首都圏（埼玉、千葉、東京、神奈川）への移動歴がある場合、又は当該移動者との濃厚接触がある場合（スポーツイベントの再開に向けた感染拡大予防ガイドライン参照）

また、上記を除外できても無症状の感染者があることを考えると、常に三密対策は必要である。

できれば1つのテントは1人で使用することが望ましいが、大会用（4～5人用）のテントに2名までであれば、頭の位置で2m以上の距離を保つことができることから可とする。ただし、以下のことを条件とする。

1. 常にテントの2方の出入り口を解放し通気を確保すること。
2. テント内では必ずマスクを着用すること。
3. テント内に入る際には、アルコール消毒液（エタノール濃度70%以上）で手指消毒すること。
4. テントは寝ることのみに使用し、それ以外の食事等は全てテント外で行うこと。
5. テント内での会話は極力避け、必要な場合は小さな声で控えめに行うこと。

またテント生活の後の5日間くらい体調管理（検温、症状チェック）を各個人が記録し、顧問がチェックする。

このガイドラインは当面、感染者が出ていない岩手県内において、合宿地を岩手県内に限ること、岩手県内に感染者が出た場合再検討することの2点を条件に、テントの共用について適用する。

岩手県高体連登山専門部の加盟校は上記ガイドラインに沿って合宿を計画、実施すること。

\*令和2年6月10日 岩手県山岳・スポーツクライミング協会理事会にて登山専門委員長、副委員長、強化委員長の3名が参加協議し策定

### 参考資料 3 長野県大町岳陽高校テント生活回復プログラム

テント生活回復プログラム

(ア) 学校でのテント張り練習と炊飯練習

(イ) 体力トレーニング

① 鷹狩山、鉾ノ峰（月に1～2回）

② 週一回（月曜日）ランニング 及び 自主練習

(ウ) 山行におけるテント泊は段階的に①から③の順に進めていく

① 車を横付けできるテント場でのテント泊

② フル装備での通常より短いコースでの1泊縦走

③ 12月以降は昨年度の活動をベースに状況をみながら進めていく